
ニートと社会復帰と異世界と

たかっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートと社会復帰と異世界と

【Nコード】

N5725X

【作者名】

たかっち

【あらすじ】

ある日のコンビニ帰りに異世界に引き摺り込まれたオレ。目の前にはひれ伏す幼女…

災厄の霸王 に向って唱えた王家に伝わる

古の呪文は召喚術？

その霸王さんは、俺の足元で死んでいます…

あつ！なーんだ！帰れるんスね？

へ？5年後？それまでは？

は？なんですか？

そのキラキラした目は？

行き当たりばつたりの異世界召喚物語

無気力なニートが見る世界は？

プロローグ（前書き）

初めまして！一応プロットなんかも書きましたが筆者処女作です。拙い文章になると思います。文章の練習でもあります。暇つぶし以外での用途はお控え下さい。

プロローグ

「はあっはあっ…」

私は走っていた。

どれ位の間走り続けているのだろうか？

もう足に力は入らない。

一歩進むごとに危うくバランスを

崩しそうになる。

それでも…止まる事は許されない…。

私を守るために散って行った

忠義の厚い臣下達…。

何故？

ほんの少し前まで、少なくとも昼過ぎまではいつもと変わらない日常だったはずだ…。

突如として神殿に出現した

災厄の霸王

その前に穏やかな日は瞬く間に

瓦解してしまった…

「女王陛下っ！」

前方を先導していた近衛兵が私を呼ぶ。

彼が開いているの扉は、この神殿で

最も硬い防壁を誇る 光神の間

私が扉を潜ると、すぐに戸が閉められる。
扉の向こうでは悲鳴に混じって

「オレ…生きて帰れたらアイツに告白するんだ…」なんて嫌な予感
しかしないセリフまで聞こえて来る。

「お待ちなさい！まだ向こうには残っている
者たちがいるはずです！」

私は整わない息を抑えながら叫ぶ。
まだ助けられる者がいるはずだ。
私は女王なのだ、父上に立派な王になると
約束したのだ。

でも私の言葉は、この部屋に虚しく響いた
だけだった。今、この部屋には私と近衛兵が二人の三人だけ
扉を閉めた近衛兵の啜り泣く声だけが
響いていた。

そう…本当は分かっている…。
伝承の通りなら、もう終わりなのだ…。

災厄の霸王 には贖えない。

黒く硬い殻に覆われた体
無数の足を駆使した、常軌を逸した動き
高らかに空を駆ける2枚の羽

絶望の淵にいる私を近衛兵の悲鳴が

現実に戻す。

「バカなっつ！どうやって？」

悲鳴の先を見た私の目は 災厄の霸王を
捉えていた。

ドアは開いていない。

近衛兵は恐怖に顔を引き攣らせながら
魔法を放つ。

炎と雷の固まりが 災厄の霸王 に迫る。

私は来るべき爆発に備え、その身を伏せた。

……。

…何も起こらない？

「まままま…魔法が効かない？」

何が起きているのか分からない私に

近衛兵の震えた声が届く。

（魔法が効かない？ いや…これは！）

次々と放たれる近衛兵の魔法。

その全ては 災厄の霸王 に届く直前に
まるで霧の様に消えてゆく。

まるで最初から無かったかの様に。

災厄の霸王 は身じろぎ一つしない。

異形すぎるその体からは、表情は読めない。
だが、まるで私達を嘲笑うかの様に魔法は

大きそうで大きくない、でもちよつと大きな
変革をもたらすとは考えていなかった。

落下するニート

「あゝ…宝くじでも当たらねえかなあ…」

そんなニートの常套句を吐きながら

俺は近所の川の土手を歩いていた。

手にはコンビニ袋がぶら下がっている。

ちなみに中身は

タバコ・1カートン

ビール・2本

ビーフジャーキー

ポテチ

少しばかりニートにしては上等な中身だ。

ブラック企業に根性だけでしがみつき

ついに心が折れて辞めてから一年と数ヶ月。

失業保険も切れ、貯蓄も少なくなってきた。そろそろ働くしかねえなゝって状況だ。

それでも中々働く気がしない。

「宝くじでも」なんてセリフも何百回目だろう？ 買ってもないのに当たる訳ないのに。

自嘲気味に土手を歩いていると、どこからともなく声が聞こえた気がした。

「バス」

某空中都市の崩壊キーワード？

でも飛行石なんて見当たらないぞ？

つてか、ある訳ねえ！
そんな一人ツツコミをしつつ辺りを見回す。
時刻は既に23時過ぎで人通りもない。
こんな時間にラピユ　ごっこしてるヤツが
いたら怖すぎる！
だが警戒心とは裏腹に、周囲には誰もいなかった。

「ついに俺の頭も腐ってきたか…」
そう呟いた瞬間、背中の方から突風が吹き荒れた。いや風じゃない！

？　？

世界が吹き荒れてる？

背後から感じたソレは、瞬く間に俺の
周囲を円形に囲んでいた。
そして次の瞬間、足元にあったハズの
土手の感触が、地面を捉えていた足裏の
感覚が消えていた。

「なつつ？」

落ちている？
錯覚じゃない！
目の前は映画のワンシーンのように
様々な景色が高速で流れて行く。
ついでに体が熱い！
痛いくらいにめっさ熱い！
でも余りの恐怖に背中が寒い？

もう訳が分からん？

全くもって訳が分からない。

(ヤバイ！死ぬ？)

次第に薄れ行く意識の中で足元に光が見えた気がした。

(まあ、いいか…あんま楽しくなかった人生だけど諦めが肝心だよな…次に生まれ代わったら金持ちで、家庭円満な環境で育った超イケメンが良いな…あっ？続きが気になってたらノベ明日発売だったのに…ツイてねえ…)

あの世でもラノベって読めんのかな？…)

そんなニート根性丸出しの思考を巡らせながら、俺は閉じゆく意識に身を任せた…。

混乱する二ト

そんな二ト根性丸出しの思考を巡らせながら、俺は閉じゆく意識に身を任せた…。

…ハズだった。

次の瞬間、強制的に目覚める事になる。
落下の終わり…つまりは着地だ。

ドオーーン！

なんて漫画みたいな優しい音じゃなかった。
擬音語にするなら

べちゃっ！

意識が遠のいていた為に、背中からモロに着地したらしい。

落下の衝撃で肺の空気を一気に吐き出す。
あまりの激痛に地面を転げ回る。

副産物として目の前がチカチカする。
運悪く交通事故にでも会った事がある人には
分かって貰えると思う。

星なんかじゃなく、網膜の中に赤やら緑やらの光点が踊るアレだ。

ひとしきり地面を転げ回り
ひとしきり呻き声を上げて、
意識の回復を待つ以外に術はない。
咳き込みつつ、徐々に回復した意識の中
視界が捉えたモノは…

……ひれ伏す少女だった…。

……えーっ！っ！

目の錯覚を信じつつ、無理矢理に
深呼吸をして目を閉じる。
わずかな希望に縋りつく様に目を開ける…

やっぱり…ひれ伏す少女がいる…

「のわあああああああああつ！」
酸素を取り戻しつつあった肺から、絶叫と共に再び酸素が吐き出さ
れる。

少女は俺の絶叫に一瞬肩を震わせたが、
まだひれ伏したスタイルのままだ。

（落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落
ち着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落

状況を整理しろ！しつかりしろ！俺！）
俺は呪文の様に自分に言い聞かせ、現実を何とか手繰り寄せ様とする。

さっきまでは土手の上

とりあえず俺は幼女に土下座をされている…

いつものコンビニの帰り道

そして幼女は土下座をしている…

幼女の前で絶叫した俺

更に幼女は土下座をしている……

幼女をマジマジと見る俺

幼女は土下座しながら

「はううううう」とか言ってる…

……これってマズくね？

いや、マズい！本気でマズい！

洒落になってない！こんな所

通行人やこの娘の親に見られたら？

通報なんかされたら再就職どころか

人生終了フラグじゃね？

つか、一刻も早くジャパニーズDOGGEZAを

土下座してでも解除してもらうべきじゃね？

思考が纏まるや否や俺は幼女に駆け寄る。

脇の下に手を入れ優しく立ち上がらせて

スカートについた汚れを払う。

「お嬢ちゃん？どうしたのかな？パパかママはどこかな？」
よし！これなら転んだ子を助け起こした
通りすがりの大人に見えるはずだ！
ここがどこかは置いておいて！

「…お兄ちゃん…怒ってない？」

幼女は上目遣いに呟いた。

真ん丸なホツペがなんとも可愛い。

やっぱ子供はこれくらいの年齢が一番
可愛いよね？これが後、何年かすれば
下ネタ大好きなビッチになるなんて…

「大丈夫だよ！オジちゃん怒ってないよ？」

転んだのかなあ？痛くないかな？」

「うん！」

「よし！エライねえ！良い子だ！」

俺は出来るだけ優しく頭を撫でた。

まだ目眩はするし、呼吸も正常化とは言い難いが、とりあえず人生
終了フラグは回避出来たハズだ。

しかし、ここは何処だろう？

土手の上にいたのは間違いない。

だが今いるのは石造りの部屋みたいだ。

窓から見える外は明るい。

明るい？23時に？

怪訝な表情で部屋を見まわす俺に少女は
スカートの手元を掴み、丁寧なお辞儀をして
見せた。

「この度はまことに申し訳ありません。
わたくしは第45代精霊王シンフォニアと
申します」

……はい？

納得する二一ト

「この度はまことに申し訳ありません。
わたくしは第45代精霊王シンフォニアと
申します」

……え〜つと。

この娘は何と言った？

精霊なんか？

聞き間違いかな？

いや、まあ子供の言う事だし

そついう遊び…なのか？

だが外国人（？）なのは間違いなさそうだ…

よくよく見れば目の前の幼女は

サラッサラの銀髪に、瞳は青い。

純白のドレスも良く似合っている。

あまりに見事な土下座と

あまりの超展開に見過ごしていたが、

これで日本人です！などと言われた日には

この娘の苦労した過去を妄想して、

三日は涙が止まらないに違いない…。

つてか、見過ごすなよ…俺…。

「え〜っとシンフォニアちゃん…で良いのかな？」
「はいっ！」

うおっ！間髪入れずに返事が返ってきた！

しかも元気に右手を挙げているだと？

ヤバイ…可愛い…連れて帰りたい…

…いや嫌いや嫌いや否！待て！

30も過ぎたオッサンの思考としては

マズ過ぎる！そもそも俺には幼女趣味も

ロリ属性もないっ！

べ…別に「小学生は最高だぜっっ！」なんて

言った事なんかないんだからねっ？

…そんなキャラ崩壊を起こしかけた俺を

幼女は首を傾げて見ていた…

イカン！このままではイカン！

不審者丸出しの上に、全く話が進まない！

「コホン…初めまして。

俺…いや、僕は遠野樹と申します。」

俺も姿勢を正し、礼儀正しく挨拶をする。

これは言わば俺の処世術。

相手が幼女だろうと手は抜け無い。

礼儀を以って接して来る相手には

礼儀を以って返す。

初対面の相手には、取り敢えず下手に出る。

無職とはいえ、元ニッポンのサラリーマンだ。

「それでシンフォニアちゃん…さん。僕は近所の土手を歩いていたはずなんですけど、

気がついたらここにいました。自分でも

おかしな事を言っているのは分かっていきます。状況を整理したいので、大人の人がいらっしやったら話しがしたいのですが…」

そこまで話すと幼女シンフォニアは突然

スカートの裾を持って跳び上がった！

空中でそのまま足を折り曲げ、両腕は

天高く突き上げられている？

「なっ？」

驚く俺の前でシンフォニアが繰り出したモノは？

それこそ驚くような…土下座だった…。

脛部分から着地してね…そりゃあ、もう綺麗に、流れるように土下座にシフトチェンジしてた…。

「ヒック…エググ…あのね…？…？…でね…

£？…だったの…でもね、シンフォニアはね…

…？…だったんだよ？だからね…あのね…ごめんな、ざい…

「ウエツオウエ…」

… お分かりになっただろうか？
俺にもさっぱり分かりません…。
気分はジャイア にイジめられた
ノビ くん の泣き事を聞いている気分だ…。
最後にはえずくシンフォニアを再び抱き起こして背中をさすってあげたよ…。

断片的に聞こえたシンフォニアの話から
推測すると…… そーゆー事？

だってホラ…シンフォニアの肩越しに
見えちゃったもん…

昼みたいに明るいのに…

ありえない位バカでかい月が…

ここがどこだか置いておいて…
じゃねーよ…俺…。

驚愕する二一ト

俺こと遠野樹はツイてない奴だった。

不運なエピソードは話すと気が滅入るので
割愛させてもらおう。

分かりやすく言うなら

小学生の時とかに、クラスでザリガニなんかを飼っていたとしよう。
クラスの皆で交代で

世話なんかしちやったりしてな？で、オレは

自分が当番の日に早めに登校するんだよ…。

そしたらザリガニ死んだりしてさ…

クラスの奴等は「遠野が殺した！」とかさ…

拳句には学級新聞に書かれたりしてさ…

まあ、クラスに一人はいるツイてない奴って

所だ。

べっ別にイジめられてた訳じゃないんだからねっ？

だから今の状況が

俺にとつては【不運】の延長線上。

またか…orz

って思う事ですんなり納得できたんだよ。

「え〜…つまり、ここは僕からすると異世界です…と…」

「……はい」

「で…貴方は人間ではなく、光の精霊とやらで、しかも女王だと…」
「……………はい」

「で、貴方は 災厄の霸王 とやらに追い詰められて王家の禁止されている呪文を使った…と」

「……………はい」

「で、その呪文とやらは異世界の生物の召喚呪文だった…と…」

「…でも私は知らなくて…」

「では先程の詠唱とやらを言ってください」

「え〜と…古の契約に基づき開け！異界の門！我は光の精霊王！我が剣、我が盾となる者を導き、この道を照らせ！バル！」

「言ってますよね？思いつ切り 異界の門 とか 者を導きとか！明らかに召喚っぽいセリフ入ってますよね？」

「はううう…だって父上は…」

「だってじゃありません？」

等々、問答しつつも俺は今シンフォニアから自分の身に起きた事について説明を受けている。

あの後、俺は泣いているシンフォニアを慰めている所を生き残った
（？）シンフォニアの
部下に見つかり、色々誤解を解いた後に
神殿とやらから、王宮とやらへ案内されて
今に至る。

シンフォニアの話のを要約するならば

災厄の霸王 が怖くて、禁止されてた
呪文を唱えたら召喚術の魔方陣（？）が
見えたから慌てて止めようとしたけど
間に合わなかったらしい。

と言っか、魔法があるらしい。

災厄の霸王 は俺が上から落ちて来た事で
死んだらしい。

ここは俺からすると異世界らしい。

シンフォニアは人ではなく 光の精霊王 で
この世界の宗教上は神様に近い存在らしい。

と…まあ、こんな所？

オーケーオーケー…

ここまではある意味テンプレ的な展開だ…。
否！全然OKじゃないけど、理解はした。
だってシンフォニアも、従者の方々も…
なんか光ってるし…全員幼児だし…。
しかも浮いてるし…。

(移動に使おうと歩くより遅いらしい)
月だってアホみたいにデカいし…。

ここまでテンプレ展開だと逆に冷静になれるよね？ニート舐めるな！って感じだ。うん！もちろん今の俺は頭がおかしい事を言ってる自覚はあるよ？

さて…ここで俺は聴かねばならない。
数々の先人が口にして、辛酸を舐めてきたあの質問だ！

正直怖い…圧倒的絶望を味わうか…または
どんな無理難題を吹っかけられるか…
それでも聴かねばならない。
ダメだった時にそなえて心を落ち着かせて…
今！万感の想いを込めて？

「…僕は帰る事が…出来るんですか？」

「はいっ！出来ますっ！」

「……はい……召喚術の魔方陣は分かっているので、そこから逆算して送還術が出来るはずです……」

シンフォニアは居住まいを正しながら

帰れる！と明言してくれた。

なんだかモジモジしてるけど、可愛いなあ！

コンチクシヨウ！

「………五年後ですケド……」

「………はい？」

驚愕するノート（後書き）

思っていたより導入長いですね…

文章って難しい…

iphoneで投稿してますが

4 & amp; 5話は打ち込んだ後に、間違っ

て消してしまったので二回目です…

嘆息するニート

「……………五年後ですケド……………」

「……………はい？」

よし！またまた思考の整理が必要だ！

異世界に召喚された俺は、どうやら帰れるらしい。ここまではOKだ。

数々の物語の先人が帰還出来なかった事を考えるなら上々だ。だが帰れるのは5年後？

なるほど……………どうやら先程の態度はモジモジしていたのでは無く、バツが悪かったのか……………。

「えっ……………と……………、帰れるのは分かりました。

それで、何故5年後なのでしょう？」

「代々精霊王家に伝わる伝承には、この禁呪

を一度使用したら、5年は使ってはいけないとしか……………」

「……………えらく曖昧な伝承ですね」

「でもっ……………でも！推測はできるのです！召喚術が封印されたのは太古の昔。その理由は世界を歪めるからだと聞いているのです！」

「歪める？」

「はい！世界に穴を開けて、違う場所からモノや生き物を召喚する

のは、世界に大きな負担をかけるのです！まして異世界ともなるとその穴は大き過ぎて、これ以上穴を開けると世界が壊れちゃうのです？次に使うのは世界についた傷が塞がってから…つまり、その期間が5年後なのだと思うのです！」

なるほど、つまりは異世界に帰れる穴は開けられるが世界が負担に耐えられない…と…。

じゃあ、無理は言えないなあ…。

自分一人が家に帰る為に、この世界が全滅とかイヤすぎる…。

どんなメガザルだよ！どんな等価交換だよ！

しかも、なんでドヤ顔なんだよ！

シンフォニア？

心の中で、ひとしきりツツコミを入れてから

俺は盛大に溜息を付いた。

ドヤ顔だったシンフォニアは、俺を見て気まずさを思い出したのか固まっている。

「…帰れるのが5年後というのは理解しました。では幾つか質問して良いですか？」

「へ？」

俺の言葉にシンフォニアは素っ頓狂な声をあげる。ん？なんか変な事言ったか？

「あの…怒ってないのですか？」

「多少は怒ってますね…でも貴方にもどうしようも無いんでしょう」

頭を撫でてやる。

神様だか王様だかには、多少無礼な態度かも知れ無い。それでも泣いている幼女を、そのままには出来なかつた。

分析する二ト

シンフォニアを落ち着かせ、俺は質問を再開する。五年も帰れないのであれば、この世界での身の振り方、向こうの世界に帰ってからの生活の為に等々、情報は必須だ。

今いる場所は精霊王国。

ここはこの世界の神様の国で、人間は普通入ってこられないらしい。

そして遙か下界に広がるのが

人間の住む土地シンフォガルド。人間や、獣人、亜人と呼ばれる者達が国家を作っているらしい。

シンフォニアや、その従者の様に人型を取れる精霊は、かなり神格の高い精霊だけ。

シンフォニガルドにいる精霊は、普通は視認すらできないらしい。

基本的に精霊は人間社会には不干渉らしく、細かい情勢は分からないらしい。

金や銀などの鉱物は存在するらしい。

分かった事はこれくらいか：まず人間がいて良かった。さすがに一人、全く違う種族に囲まれて五年は辛い…。そして金や銀の鉱物が

ある事！これは持ち帰る事が出来れば、帰った後の生活に目処がつ

く。
幸い引き摺り込まれた時に見た 円形 の
範囲に収まる程度なら、荷物の持ち帰りも
可能らしいし…。

五年間も帰れなかった場合、最も困るのは
帰った後の生活だ。五年も帰らなければ、
間違いなくアパートは強制解約だし、
身分証の有効期限も切れている。
身内でもいれば良いが、とうの昔に縁を
切ったきりなので連絡先も分からない。
そこに手持ちの数千円だけで放り出された場合、
待っているのは路上生活しかないし。
厳密に言えば、アパートの解約時に部屋にあるエロゲやら、ギャル
ゲやら、その他の
グッズが人目につくという心配もあるけど、
業者の人と会うわけでもないしな。

つまりはまだ詰んでないって事か？
働くのはイヤだけど、この世界の
金の価値次第じゃ帰ってからウハウハ？
でも、さすがにシンフォニア相手に迷惑料請求する訳にもいかない
しなあ…。
幼女だし…神様だし…頼んだらくれそうだけど、人として何か終わ
る気がするな…。
でも働くのもなあ…。

「そついえばシンフォニア様？」

「はいっ！」

ちなみにシンフォニアは泣き止んだ後、
とても元気になった。うん！やっぱり幼女は元気が一番だ。

「何故、僕は召喚されたのでしょうか？」

「え……？だから私が魔法で……」

「いや、え〜っと、そうじゃなくて僕が選ばれた理由ですよ。僕の
いた世界には60億もの
人間がいたのですよ？」

そう、この質問だけは聴かねばならない。

もしかしたら俺の中には勇者だの
救世主だのになる【特別な才能】が！

あるのかもしれないのだ！！

秘められた魔力あったりとか

前世がアポロ アスだったとか

実は一子相伝の暗殺拳の使い手とか

聖闘衣を修理できたりとか

実は死神とか

実は特質系の念能 が使えたとか

中には楽しんで稼げる才能があるかも

知れない！

「さあ……？なんででしょう？」

……ソウデスカ……。

タダノ イツモノ ビンボウクジ デスカ……。

全力で落ち込む俺がいた……。

「でつでもっ！イツキ様は凄いですよ！

災厄の霸王」も倒せるくらいだし！

何より私に触れるのですからっ？

これはもう立派な勇者様と言っても

良いのではないでしょうかつ！」

幼女はニートを慰めた！

…あまりこっちはないようだ…

ん？待てよ？

「普通はシンフォニア様には触れないのですか？」

「そうです！生身の人間は神格を持つ精霊王に触れる事など出来な
いはずなのですっ！」

異世界に来て知った自分の才能！

特殊スキル【幼女に触れる】

…ダメだ…ある意味はアリかも知れないけどダメだ…。気分で言う
とorzだ…。こうなると選択肢は多く無い！

- 1・精霊王国で五年間養ってもらっ
- 2・人間の住む土地まで行き、地味に働く
- 3・シンフォニアをひたすら撫でる

………3…かな？………

いやいやいやいや！ダメダメダメダメ！
都条例に引つ掛かるから！惜しいけど！
1も精神的に無理だ！幼女と幼児の国で
30過ぎのオッサンが養って貰うとか！
人としてダメすぎる！残り物は？…なの
か？
一応、シンフォニアに確認してみるか？
3でもOKなのかも知れ無いしな！よし！

「イツキ様はとにかく凄いので、勇者様だと思えますっ！！」

確認するよりも前に決まっちゃった？
めっさキラキラしてるよ？目が！
笑顔が眩し過ぎる……。

「いや、僕なんて……」

「勇者様だと思えますっ！！」

「あのね……」

「勇者様だと思えますっ！！」

最後の力を振り絞って抵抗するも、
無邪気な幼女に敵う訳はなく…
俺の下界行きは決定した。

分析する二ト（後書き）

かなり文章にブレがありますね…
読みにくいと思います…すいません

次回こそは主人公が旅立つハズ！

【第一章】旅立ちの二ト（前書き）

『章管理』ボタンを押すと

iPhoneのプラウザが落ちるので
タイトルに付けました。

ここからが【第一章】スタートです。

また断片的にやりたい事、世界設定を
まとめて起承転結を大まかに書いて
スタートした為に、作品紹介に若干の
違和感を覚えたので修正しました。
スイマセン…

とりあえず、完結目指して頑張ります。

【第一章】旅立ちの二一ト

そんな訳で俺は今、森の中だ。
どこまで歩いても森の中だ…

文学的に言うなら

『木のトンネルを抜けると、そこは森だった…』
ネット風に言うなら

『どうしてこうなった』である。

さて500回目くらいの後悔と共に記憶を
紐解いてみるとしよう。

幼女で女王で精霊で神様なシンフォニアは、
あるう事が俺を『勇者』認定してしまった。

その純粹で期待と尊敬に満ちた眼差しを前に
「帰れるまで5年間養って下さい」なんて
言えるワケないよね？

そもそも幼女と幼児に言えないけどさ…
そんな事…。

そして俺の口から出た言葉は

「じゃあ、帰れるまで勇者っぽい事でも
しちやおっかな…アハハハ…」

棒読み

である。大切なので、もう一度言おう…

『ど・う・し・て・こ・う・な・っ・た！』

その後、シンフォニアの王宮で休ませて貰い

(普通に立派な城だった)次の日にシンフォニアや、従者や、近衛

兵の方々に見送られて

今に至る。ちなみに、旅立つにあたっては

伝説の剣や支度金は一切渡されていない。

幼女に金の催促なんで出来ないよね？

大人だもん…オッサンだもん…。

唯一、シンフォニアが頬にチューしてくれただけだ。

ん？そう！ほっぺにちゅーだ！

「光の精霊王の祝福ですっ！」と

真っ赤な顔でチューしてくれたのだ！

頬にチューくらいなら捕まらないよね？

あの時のシンフォニアは実に可愛いかった。

元の世界に戻れたら、幼女が出てくるアニメも

好き嫌いせずに見てみよう…。今なら

「幼女は最高だぜっっ！」とか言えそうだ。

ゲフン…ゲフン…。

ちゅーして貰った後に下界に降りる際は、

やたら大きい水晶に触れるだけで良かった。

シンフォニア達のいる精霊王国は結界に

守られているらしく、

出るにも 転送 の魔法が必要らしい。

召喚はダメだけど 転送 はOKとか…

以外と適当だな…この世界…。

五年後にはお迎えが来るらしいけど…。

さて、そんな訳で俺は今、森の中だ。

え？ 災厄の霸王？
なにそれ？そんなのいた？

分かってる…

ヤツについて語らないといけない事は…

今まで巧みにスルーして説明を避けて

みたけど…そろそろ限界の様だ…。

俺が召喚された原因を作ったヤツ。

シンフォニア達…精霊を恐怖の底に

叩き落とした 災厄の霸王

ヤツは俺が召喚された時に、俺の下で死んでいた…正確には靴の裏
で死んでいた。

つまりは、とても小さい生物だ。

黒く硬い殻に覆われた体

無数の足を駆使した、常軌を逸した動き

高らかに空を駆ける2枚の羽

まあ、魔法が効かないとか…

(精霊は物理攻撃力がとても弱い)

精霊の力を探知して追いかけてくるとか…

それなりにハイスペックな生物らしい。

ロープレで言うとはぐれメタ？

でも俺からすれば…

ぶっちゃけただの…

.....ゴキブリだった..

史上初！ゴキブリを倒す為に召喚された
勇者がいた！...って言うか俺だった..。

ちなみに 災厄の霸王 ことゴキブリに
襲われた近衛兵さん（見た目5歳児）は
生きていた。（当たり前だ！）

必殺フライングゴキブリを顔面にくらって
気絶したらしい...
こちらも気が付いた後に泣きじゃくるので
あやすのが大変だった..

そんな訳で森にいるのだ！
説明終わりつつ？

こんなバカな説明をしているが、
実は状況的には結構マズいのだ。
まず食料が尽きかけている..

俺が持ち込んだ食料は

・ポテチ1袋

・ビーフジャーキー1袋

精霊は『食べる』という概念が無かった為
食料の補充は出来ていない。

水に関しては川を発見したので問題ない。

（ビールを飲み干して空き缶を水筒にした）

夜間を過ごす為に火が必要だったが、
世間の逆風にも関わらず 喫煙者 という
ジョブを持っている俺はライター常備だ。
もし 喫煙者 でなければ火も起こせなかったかと思うとゾッとす
る…

皆も異世界に召喚された時の為に

喫煙者 のジョブは持っておこうね！

増税反対？

個人的力説はさて置いて、精霊王国を出て
既に二日が立っている。

もうそろそろ日が暮れるので、三日目の晩が
近づいている事になる。

このままでは 災厄の霸王 を倒した勇者は
最初の村に辿り着く前に餓死してしまう…

はてさて…そろそろイベントでも…

「

！」

…起きた様である…

疾走の二ト（前書き）

若干グロい話になります。
苦手な方は御遠慮下さい。

疾走の二ト

「 「！」

その声は俺の前方から聞こえてきた。

よく見れば、もう日も落ちかけているのに
前方は僅かに明るい。

どうやら火を炊いているみたいだ。

いや、危なかった！

どうやら餓死する前に人里に出たみたいだ。

でも、まだ油断は出来ない！

なぜなら、この世界の 人間 が俺と同じ

人間 である保証などないからだ。

最悪、見た目からして違う可能性もある。

でもなく、この世界で生きて行くなら、

コミュニケーションとか不可欠なんだよな。

やばい！気楽に考えてたけど、知らない人とコミュニケーションな

んて俺の一番苦手分野だ！

でも、このままじゃ餓死確定だしな…。

そこまで考えた所で、急に前方から金属音がした。

とりあえず近くの木蔭に隠れる。

社会人経験があるとは言え、俺は人見知りなのだ！シンフォニアの
場合は幼児だったから

良かったものの、

いきなり普通の人とか無理だった！

だって二トだもん！

(向かって来るのは……女……?)

暗がりではよくは見えないが、小柄な人型の生物が見えた。頭からボロ布を纏っているせいで推測でしかないが、人間の女に見える。足には枷の様な物と、そこから伸びる鎖と、繋がった鉄球の様な物が見える。表情は見えないが、鬼気迫るものを感じる。

(おいおい……未知との遭遇一発目がこれかよ!)

女(?)は息を荒げながら足を引き摺るが、森の道に足を取られて転ぶ。

それでも前に進もうと、枷についた鎖を必死で手繰り寄せていた。

(うわっ!なんだ?この状況?どうする?)

とりあえず助けるか?)

意を決して出ようとした俺の足は再び止まる。女の来た方向に人の気配がしたからだ。

(今度は……男?)

次に現れたのは男……だった。

女を探していたのか息が荒い。

(人間……だよな?)

俺の目はおかしくなったのだろうか?

見る限り男は胴体に頭、腕、足をくっ付けた俺と変わらない造形をしている。

異様なのは、その格好と体格だ。

男は素肌の上に革のプロテクターの様な物を着ている。更に右手には刃渡り1mはあるつかという刃物。さらにはマツチヨと言うには

あまりにも猛々しい肉体をしている。

ぶっちゃけると、かなり怖い。

イメージで言うなら、某世紀末覇者の下っ端だ。更に身長がおかしい！俺の身長は180cmある。

現代日本では、まあ高めの部類だ。

だが目の前の男は明らかに俺よりデカい！

って言うより、明らかに2mは越えている！

熊か？こいつは熊なのか？

俺が男の異形に目を奪われていると、男は

怯えて立ち上がる事も出来ない女の目の前に

立ち、その剣を傍らに突き立てた。

(おいおい…まさか…)

俺の嫌な予感はずれる事を知らない。

それは異世界でも共通の確定事項だったようだ。そう…男は泣き叫ぶ女の服を引き裂き始めた。つまりは…レイプだ…。

あまりの事態に俺の足は逆方向に向いていた。勝手に…物音を立て無い様に、慎重かつ早く。

これだけは言っておく！

俺はレイプなんか嫌いだ！

借りて来るAVだってレイプ物なんか借りた事もない。両者の合意の上の、そういうプレイなら百歩譲ってアリとしよう。

待て待て待て待て待て！待てっ！
ふざけんな！そっちは戻る道じゃねーか！
アホか！止まれ！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！
震えてんのに、何でそんなに急いでんだよ！
足音出してんじゃねえよ！
ふざけんなよっ！
止まれ止まれ止まれ止まれ！クソっ！
なんだよ！なんだってんだよ！
何させるつもりだっつてんだよっ！
チクシヨウ！ふざけんなよっ……………

……………チクシヨウ……………

もう足は止まってくれなかった。
体に力は入らない。今にもその場にへたりこみそうなクセに走るス
ピードは落ちない。
木の枝が顔を引っ搔いても、足が纏れても、
俺の足は止まる事なく前に進む…。
顔だって涙と鼻水でグシャグシャだ…。
俺は何をしているんだろ…。

枝を掻き分け、男の背後に飛び出た俺は

男の後頭部へ渾身の力で拳を叩き込んだ。
男は不意をつかれたせいかわ、その場に屈む。
その隙に俺は男から女を引き剥がし、男と女の間
に体を挿入する。男は服を引き裂くのに夢中だ
った。挿入もしていなかった。
間に合った…のかも知れ無い…。

「
「！
「！

男も女も、何かを叫んでいるが分からない。
ひょっとして言葉が通じない？なんで？
シンフォニアとは普通に話せたのに？

何も持っていない右手で男を制し、
後ろを振り返ると女と目が合った。

…そんな状況じゃなかったのに…

右手の近くを温かい風が通った気がした…
振り返ると…

俺の右手の親指と、人差し指が…

…
無
か
っ
た。

疾走の二ト（後書き）

と、ここまで自分で読み返して見て
気がついたのですが

第二話あたりが、かなり好きな小説と
似ていた…と言うか似すぎていた事実
に気がつきました。

どうやら、その小説のその部分を読んだのが
かなり前だったので失念していた様です。
自分自身のいい加減さ、記憶力のなさが
招いた事態とも重々承知しております。

この様な拙い作品を見て下さった皆様、
また恐れ多くも「お気に入り登録」して
下さった皆様には申し訳ない気持ちで
一杯です。

既に当該部分には若干の修正を加えました。
今後クレーム、指摘等が来る様であれば
大幅な改編、打ち切り削除も検討したいと
思います。

読んで頂いている皆様には、重ねて申し訳ありません。
どうか今暫く、拙作にお付き合い下さい。

瀕死の二一ト（前書き）

グロ展開継続中です。

瀕死の二一ト

その瞬間はスローモーションだった。
勿論、実際に時間が遅くなった訳じゃない。
まるで、そう…事故に合う直前に世界の
流れが急に緩慢になるような感覚…。

生まれてから三十年と少し…。
怪我やら何やら、色々あったが苦楽を共に
してきた俺の右手。
そこにある筈の親指と人差し指は
あるべき場所に…無かった。

断面に見える残された骨…
ピンク色の筋肉繊維…
白い筋の様な物…

それらは、ある事実を俺に伝えていた…。
そう…切り取られたのだ…と…。

そこに思考が到達した瞬間、世界は一気に
加速していた。

「ぎゃあああああああああ？」

俺の指から大量の血が噴き出す。
あまりの激痛に、見ていた筈の怪我にすら

思考が追いつかない。

(え?...え?...なんだこれなんだこれ)

叫ぶ事しか出来ない俺に、男は容赦なく拳を、蹴りを浴びせて来る。

(ちょ...待っっ...)

ガッ！ガスッ！グシャッ！

二発、三発... 男の攻撃は休む事なく続く。

当たり前だ。自分に殺意を持って刃を

振るった男が、指が飛んだくらいで

攻撃を緩める筈がない。

俺は、どれ程平和ボケしているのだろうか？

怪我を心配して貰えるとも思ったのだろうか？

止まる事の無い男の暴力。

とてつもなく莫大な真実味を持って、

俺は死を覚悟した。

次の瞬間、自分の上に柔らかかモノが

被せられた気がした。

おそらく頭にも尋常ではない怪我を

しているのだろう。目に血が流れ込み、

視界は殆ど効かない。

微かに見えたソレは、女が纏っていた

ボロ布だった...

(ま...さ.....か.....)

言う事を効かない身体を無理矢理動かし、
目の血を拭い、頭をもたげる。
俺の上には女が覆い被さっていた。

「(何してる！退け！…退いてくれ？
頼むから…退いて…くれ…)」

必死に叫ぼうとするも、血が気管支に
とめど無く流れ込み、俺の叫びは
声にならない。

ガッ!?

急に俺の上から、僅かな重みが消えた。

(おい?…おいつ!…)

無様に地面を這いずり、辺りを見ると
女が転がっているのが見えた。
そこから先は更に無様だった…
俺は声にもならない雄叫びを挙げ、
立ち上がった所へ一撃を喰らった。
薄れゆく意識の中、もう一人誰かが来た
気配がした。

…パチッ…パチッ…

何かが弾ける音がする…
ゆっくりと目を開けようとすると
右手から、全身から激しい痛みを感じた。

「（ガハツ…があああああ？）」

口から叫び声が出そうになるが、
喉にも激痛を感じ、声にすらならない。
転げ回ろうにも、起き上がろうにも
身体はピクリとも反応しなかった。

息すら満足に出来ない。
痛み能耐えながら呼吸を整え、何とか目を
開ける。

目の前には少女の顔があった。
いや、正確には少女であろう…顔だ。
少女の顔には、とても大きな傷があった。
古傷だろうか？少なくとも、ここ数日の
怪我には見えない。
残った部分の造形が、この女がまだ少女で
ある事を伝えていた。
纏っているボロ布からして、先程の女かも
知れ無い。

少女は何も喋らない。
ただ…泣いていた…。
少女の顔は、俺を覗き込んでいる。

彼女の流した涙は、その頬を伝う事なく
俺の顔に降り注いでいた。

どうやら体制的に、俺は少女に膝枕を
させている様だった。

視線を動かすと、俺は手足を縛られており
少女も手を縛られて、その先は近くの木に
結ばれていた。

近くには人間だったであろう肉塊も転がっており、
焚き火の近くには数人の男が見えた。
状況から考えて、この肉塊は男達の仕業だろう。

少女はただ泣いていた。

たまに口が動き、「……」と音を発する。

何かを言っているのか、意味の無い呻き声
なのかは分からない。

ただ、その悲しい瞳には俺に対する謝罪と
罪悪感に満ちていた。

「（大丈夫…大丈夫だから…）」

上手く伝えて、頭でも撫でてやりたいと
思った。でも、相変わらず俺の身体は
指一本動かない。声も出ない。

（ダセエ…マジでダセエな…俺…）

もう分かっている。自分ではこの少女を
救えない事を…。

もう分かっている。自分はこのまま死を
待つだけだと言う事を…。

俺の頬を、生温かい何かが伝った。
次の瞬間、俺の頭は地面に叩きつけられた。
気が付かない内に、男達の一人が近くにいた様だ。
男は俺を蹴り飛ばし、少女の髪を掴んで
引き摺って行く。

「や…や…やめ…ろ…止めてく…だ…さ…い
おね…が…い…しま…す…」

俺は残された力の全てを使い、声を出す。
喉の痛みなんて、構っていられなかった。
だが、そのあまりに細い声は男に届かない。
口の中は泥と血の味しかしい。
男に引き摺られる女と目があつた。
その瞳は、変わらず悲しみと謝罪を
湛えていた。

（やめてくれ…そんな目で見ないでくれ…
俺は君を助ける事が出来なかったんだ…
それだけじゃない…一度は見捨てて逃げたんだ…
きつと…心の何処かで、この状況を
君のせいだと思ってるんだ…汚い奴なんだ…
だから…そんな目で見ないでくれ…
頼むから…）

また意識が遠くなる感覚がした。
きつとこのまま死ぬのだろう。

だが、目を閉じると違和感を感じた。

(身体が移動している?)

男達と少女が視界から少しずつ遠ざかる。
どうやら引き摺られている様だ。

男達の仲間だろうか?

もう、どうでも良い。俺は死ぬのだ。

それは絶対的に、圧倒的に動かない事実。
俺は閉じゆく意識に、再度身を任せた。

「
！」

誰かが声を発し、何かが光った気がした。

「
！」

もう一度、声が聞こえて何かが光る。

不意に身体の痛みが軽くなり、身体を起こす。先程まで何かを呟いていたソイツは…

「大丈夫か？」

…言葉を喋った。

瀕死の二一ト（後書き）

まだグロ展開続きます。

次回は逆襲編です。

復活の二一ト

「大丈夫か？」

ソイツは喋った…

身体の痛みが消えた事、言葉が通じた事。どちらの驚くべき事態すらその驚きの前には霞んでいた。

ソイツは形こそ人だった。

確かに二足歩行生物だった。

スラツとした長身に金髪をなびかせ、

素肌の上に赤いベスト

脛の途中までしかない、動き易そうなズボン腕には齧つい手甲をはめている。

問題は一つだ！いや正確には二つか？

ソイツの顔は………

………ウサギさんだった。

いや、訂正しておこう！

とても精悍な顔付きのウサギさんだ！

きつとイケメンのウサギさんがいるなら、

この目の前のウサギさんだろう。

そして、その素肌は白いモッフモフの毛で覆われていた。

そのウサギさんは、俺の手に巻かれたロープを解いている。

(これが…獣人…?)

俺はシンフォニアから受けた説明を
思い出していた。シンフォガルドには
人間の他にも人間に似た種族がいるらしい。
その一つが『獣人』だ。

彼等は人間よりも優れた身体能力を誇り、
人間には使えない様なスキルを持つらしい。
その反面、繁殖力が弱く数は人間の十分の一
程らしい。耳や尻尾などの身体の一部が獣の
特徴を持つ者が『半獣人』。顔や身体全体が
獣な者を『獣人』と呼ぶとかなんとか。

「どうした？獣人がそんなに珍しいか？」

呆気にとられた俺の視線が不快だったのか、
ウサギさんは不機嫌そうに話しかけてきた。
どうやら、このウサギさんは日本語が
喋れるらしい。

「すみません…気分を害したなら謝ります…」

俺の謝罪にウサギさんは鼻をならす。

「近くを通ったのだが、精霊共がヤケに騒ぐのでな。来てみれば、
死にかけの人間がいた…。悪いが勝手に治癒の魔法と、通訳の魔法
をかけさせて貰ったぞ？私は旅の途中でな…この国の言葉は知らん
のだ。言葉が通じなければ、お前が何者が分からんしな…」

(治療？通訳？魔法？さっきの光の事か？)

見てみると傷はかなり塞がっていた。

よくよく考えれば、身体を起こせているし、
視界も回復している。

右手の出血も止まっている様に見える。

「助けてくれて有難う御座います…魔法って凄いですね…」

「何を言っている？お前も光の精霊の『加護持ち』だろう？」

…何を言っただ？このウサギさん？

…ダメだ！そんな場合じゃないっ？

「有難う御座いました！じゃあっ！」

そう言って駆け出そうとしたオレを

ウサギさんの声が引き止める。

「何処へ行く？折角拾った命だろう？」

「そうですね…感謝しています…」

「お前は、あの人間達に殺されかけたのだろう？」

「…そうですね…」

「それでも戻る…と？」

「…そうみたいですな」

「何故だ？」

「さあ？」

「報復か？」

「…多分そうなのでしょうね」

「足が震えているぞ？」

「そうですね…力も入りませんね…怖くて…」

「泣いてるぞ？」

「ええ…止まりませんね…ビビってますから…」

「治療魔法も、一度で全てを治す訳じゃない
無理をすれば傷が開き、今度こそ死ぬぞ？」

「あゝ…あのセリフはこういう時に使うのか…」

「……？」

「いや、好きな小説のセリフなんですよ…」

「ほづ…？」

「つまりは…ベスト　ンディションだ！ってね…死ぬ前に一回はリ
アルで言いたかったんですよね…」

「…私に助けを求めようとは思わないのか？」

「命の恩人に助けられた命を、僕は不義理にも今から捨てようとしています。その上、命を賭けてくれ…なんて言えませんよね…？でも、それでも、もし頼みを聞いてくれるなら…逃げてくる女の子を逃がして貰えませんか？勝手ですけど…」

「…良いだろう…」

俺は駆け出した。

まだ身体は痛い。力も入らない。

恐怖に足は震える、涙も止まらない。

もちろん、これから死ぬのも怖い。

無駄にウサギさんと会話をしたのだから

少しでも生きている時間を伸ばしたかったの

かも知れ無い。

本当に俺って奴は汚い人間だな…。

それでも行かなきゃな…。

あの娘が、あんな瞳をしたまま犯され、

死ぬかも知れ無い状況を傍観する…

そんな事は出来ない…。

目覚めが悪いんだよ…。

睡眠大好きなニートを殺す気か？

まあ、今からほぼ間違い無く死ぬけどなっ！

後ろでウサギさんの声が聞こえた気がした。

そして…背中に何かに触れたかと思うと、

俺の身体は光に包まれた…。

復活の二一ト（後書き）

まさかの逆襲ならず…orz…
次回こそ逆襲編です。

逆襲の二一ト（前書き）

相当グロいです。

苦手な方は、絶対見ないで下さい。

逆襲の二一ト

(何だ…?)

何かが背中に触れた直後、俺はバランスを崩していた。一瞬、身体が光ったかと思うとまるで階段を踏み外した様な感覚に襲われた。そこまでの圧力を感じた訳じゃない。だが、俺の身体は急に襲ってきた違和感に完全に平衡感覚を崩されていた。

(…とっ…とおっ?)

何とかバランスを立て直そうと、俺は勢いに任せて、右足で地を蹴った。単純に急ブレーキをかけるより、勢いでバランスを保とうとした…それだけだった…それだけだった筈だ…。

(……………へ?)

俺の身体は飛んでいた…。正確には地面を蹴った勢いで、超低空飛行していた。目測でも20mはあった筈の距離は一瞬にして消え去り、俺の横には少女を地面に組み伏せている男が呆然とした顔で俺を見上げている。俺は左足で着地していた。あまりの事態に次に踏み出す予定だった右足は上がったままだ。

「らああああああああああつっ?」

俺は勢いに任せ、右足を振り下ろす。

格闘技経験なんか無い。ガチの喧嘩なんか高校の時が最後だ。不格

好に繰り出された蹴りは男の側頭部を捉える。夢中で放たれた攻撃は、濁いた音を響かせ男の顔を地面に叩きつけた。

(やつ…た?…違う?まだっ?)

蹴り足を振り抜いたせいで崩れた体制を立て直し、俺は男の頭を勢いよく踏みつける。先程、失敗して死にかけたばかりだ。いつまでも平和ボケはしてられない。念入りに男の頭を踏みつけて少女を見る。少女は何が起こっているのか分からない…と言った顔をしていた。勿論俺だって分かってない、何故俺の足は化け物じみた跳躍をしたのかも。圧倒的に体格差のある相手が地面に転がっているかも。それでもやらなきゃならない。焚き火を挟んで呆気にとられていた男達が、刃物を手に立ち上がっているのだから。

「おいっ！おいっっ？」

惚けている少女の頬を軽く叩き、彼女を現実に戻す。

「走れっっ？」

俺は駆けて来た方向、ウサギさんがいる筈の方向を指差して叫ぶ。しかし、少女は俺の袖を掴んで動かない。そして、目に涙を貯めて必死に首を振る。

「…あつ…あつっ…」

少女は何か言葉を絞り出そうとしているが、彼女の口からは呻く様な声が出るばかりだった。だが、その目は「逃げて」と叫んでいる様に見えた。

(クソッ！なんでだ？このバカ？)

そもそも俺は何故、少女が逃げてくれると思ったのだろうか？最初に出会った時に、少女が逃げていたから？自分を庇った少女が逃げない可能性に全く気がつかなかった？

「…クソがつ！…やったらあああつ？」

俺は傍にあつた刃物を手に立ち上がった。恐らくは、地面に転がっている男の物だろう。鞘は付いていない。完全な計算違いに、俺の思考は焦げ付きかけている。だが、止まる事も引き返す事もできない。殺人者は待つてはくれない。だが不覚にも、俺の思考は再び速度を落とす。

(軽い？なんで？…これじゃハリボテ…)

持ち上げた刃物の異常な軽さに動きが止まる。その間は一瞬だった筈だ。

(マズイっっ？)

気が付いた時には、男が目の前で刃物を振りかぶっていた。

「あああつっっ？」

死の恐怖に声が出る。思わず目を瞑る。

…しかし男の刃物は、いつまでたっても俺の身体に届かない。ハリボテの様に軽い俺の握った刃物の先に、僅かに重みを感じる。

恐る恐る目を開けた先には……鼻から額にかけて、刃物に貫かれた男が…死体がぶら下がっていた。

焚き火に照らされ、あまりにも鮮明に見えるソレ。

先ほどまで生きていた人間。

貫かれた傷口からしたたる、とろみを帯びた血液。

掻き分けられた肉片。

細やかに収縮し、微細な運動をする筋肉。

衝撃で飛び出した眼球。

その光景に、俺の胃液は一気に逆流した。

無意識に抵抗するも、あまりの勢いに口の端から溢れ出し、口の中に酸味が広がる。俺は刃物から伝わる感触に耐え切れず、思わず手を離れた…離してしまった。

「殺…した…？オレが…？なん…で？」

意思に反して身体は、くの字に折れ曲がる。

口の中に貯め込んだ胃液は、一気に流れ出る。

心の中にドス黒い何かが広がる。

頭は血が上っているのか、血の気が引いているのか分からない奇妙な感覚を訴える。

思考はどんどん閉じて行く。

完全に時間が止まった様な感覚。

俺は自然と膝を地に着いていた。

どれ位の間、そうしていただろう？

不意に腹に温かみを感じて意識が戻る。

視線を下に動かすと…俺の腹から刃が生えていた…。

「つつつつが？……ぎゃあああつ？」

痛みを堪えた訳じゃなかった。ただ今日だけで何度も感じた圧倒的な死の感覚、それにつられて見上げた先には…俺の指を切り落とした男が、勝ち誇った笑みを浮かべていた。

(…あゝあ…もう…なんでかな…くやしいな…)

急に冷えた思考、本日三度目の死の覚悟。

だが、俺は見てしまった。

本日二度目…俺と男の間に割り込んだ少女を…。

男が刃を振りかぶった瞬間、俺の中で何かが弾けた。

俺は少女を飛び越え、左手で男の頭を鷲掴みにすると地面に叩きつけていた。

頭から血を流し、不様に地面を這いずる男。

俺は刃物を拾い上げる。

これからする事に心は何も感じていない。

俺は刃物を振りかぶる。

一瞬男と目が合い、男の顔が恐怖に引き攣るのが見えた。

(だから…?)

逆襲の二ト（後書き）

書いている内に、とんでもないグロ方向へ…

orz…

またバトルシーンの難しさと、他の作者様の偉大さが、大変良く分かりました。かなり読みにくかったと思います。申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5725x/>

ニートと社会復帰と異世界と

2011年10月19日03時10分発行